

エジプト学の最新研究 2017 ナポリ大会

黒沼 太一

Current Research in Egyptology, Naples, 2017

Taichi KURONUMA

キーワード：国際会議、古代エジプト・スーダン研究、若手研究者

Key-words: international conference, ancient Egypt and Sudan studies, young researchers

はじめに

昨今の古代エジプト・スーダン研究では、国際エジプト学者会議 (International Conference for Egyptologists: ICE) などの幅広い世代の研究者が参加・交流する著名な国際会議に加えて、大学院博士課程～ポストドクタークラスの若手研究者を対象とした国際会議が増加している。今回ここに紹介するエジプト学の最新研究 (Current Research in Egyptology: CRE) は近年増加している若手研究者向けの国際会議の中では、現在最も著名な会議と言えるだろう。本稿では、2017年5月にイタリア共和国ナポリ市で開催された CRE 2017 を振り返り、昨今の古代エジプト・スーダン研究における若手研究者の動向を紹介したいと考える。

1. CRE の基本情報

ナポリでの会議を紹介する前に、CRE とはどのような会議なのかについて瞥見したい。CRE の初回大会は2000年に、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国 (イギリス) のオクスフォード (Oxford) 市に所在するアシュモリアン (Ashmolean) 博物館での大会に遡り、以後毎年大会が開催されてきた。開催地に関しては、2015年のオクスフォード市における大会までは、2010年のオランダ王国のライデン (Leiden) 大学での大会を除いてイギリス内に留まっていたが、2016年のポーランド共和国クラクフ (Kraków) 大会からは当時の運営委員会によって方針が変更され、イギリス国外でも年次大会が開催されるようになった。2018年6月にはチェコ共和国プラハ市にて年次大会の開催が予定されており、本稿で触れるナポリ大会を含め、大陸ヨーロッパにおいて3年連続で年次大会が開催されることとなっている。

さて、この会議は、参加の応募に事前の会員登録などは必要ではなく、先史時代からイスラーム期に至るエジプト・スーダン地域を研究している若手研究者であれば、誰

でも応募が可能である。管見に及ぶ限り、ここ数年は口頭発表やポスター発表に限らず、応募にあたって英語で1000文字の発表要旨¹⁾を提出することが通例となっており、審査を経て、会議参加の可否が通知される。昨今は CRE への参加希望人数が増加しており、採択はされたものの、口頭発表を希望しながらポスター発表へと回される事例も多く見られるようになってきている。

2. CRE ナポリ大会の日程・会場・参加者

通算18回目となるナポリ大会は、キアタモーネ通り (Via Chiatamone) 61番に所在するメスニル宮殿 (Palazzo du Mesnil) (図1) にて、2017年5月3日から6日の4日間の会期で実施された。メスニル宮殿は現在、ナポリ東洋大学 (Università degli studi di Napoli 'L'Orientale') の管理下にあり、大学が所有する考古学コレクションを展示している東洋学博物館ウンベルト・シェッラート (Museo Orientale "Umberto Scerrato") が地階に設営されている。会期中の、一日の基本的な流れは表1に示した。朝と夕方の基調講演は最も多くの人数を収容できる会議室 (Conference Room) で行われ、その後の口頭発表セッ



図1 会場の外観と参加者

表1 一日の基本的な流れ

時間	イベント
9:00-9:30	基調講演 1
9:30-10:45	口頭発表午前の部 1
10:45-11:15	コーヒープレイク兼ポスターセッション
11:15-12:55	口頭発表午前の部 2
12:55-14:00	昼食
14:00-15:45	口頭発表午後の部 1
15:45-16:15	コーヒープレイク兼ポスターセッション
16:15-17:05	口頭発表午後の部 2
17:05-17:35	基調講演 2

セッションは会議室を含む3部屋で並行して開かれた。口頭発表は1コマ25分で設定され、発表に20分、質疑応答に5分が割り当てられた。一方でポスターセッションは、先述の通りコーヒープレイク中にコアタイムが設けられ、振舞われるコーヒーや茶菓子などを手に取りつつざっくりばらんな議論が交わされた(図2)。

参加者は、本会議がヨーロッパで始まったこともあってかヨーロッパの大学・研究機関に在籍している研究者が参加者の大多数を占めたが、遠くアメリカ大陸・アジアからの参加者もあった。ヨーロッパからは、イタリアで開催されたこともあり、やはり同国の大学・研究機関に在籍している若手研究者の姿が目立った。アメリカ大陸からは、北はアメリカ合衆国から、南はアルゼンチン共和国からの参加者があった。アジアからは日本からの参加者があり、早稲田大学の山田綾乃氏と山崎世理愛氏が、筆者の他に参加した。両氏は口頭発表を、筆者はポスター発表を行った。このようにヨーロッパのみならず遠隔の地域も含めた世界各地からの参加者があることは、CREが古代エジプト・スーダン研究を行っている若手研究者達によく知られた国際会議であることを端的に示しているといえよう。

3. 基調講演・研究発表の概要

今回のCREでは、合計で7本の基調講演が行われた。講演者は、講演順に列記すると、ピサ大学のマリリーナ・ベトロ(Marilina Betrò)教授、ナポリ東洋大学のイレーネ・ブラガンティーニ(Irene Bragantini)教授、トリノ・エジプト博物館館長のクリスティアン・グレコ(Christian Greco)博士、ナポリ東洋大学のアンドレア・マンゾ(Andrea Manzo)教授、ミラノ大学のパトリツィア・ピアチェンティーニ(Patrizia Piacentini)教授、ボローニャ考古学博物館学芸員のダニエラ・ピッキ(Daniela Picchi)氏、ナポリ東洋大学のロザンナ・ピレリ(Rosanna Pirelli)教授、とイタリアの古代エジプト・スーダン研究を牽引するメンバーが招かれた。

基調講演では、イタリアの大学によって現在行われているエジプト、及びスーダンでの調査から得られた知見が調



図2 ポスターセッション

査者自身によって紹介されるとともに、イタリア国内に所在する博物館コレクションとそれらの活用に関わる研究活動が取り扱われた。エジプトでの調査活動に関しては、ピサ大学によるルクソール(Luxor)左岸に所在する墓域の一つであるドゥラ・アブ・エル=ナガ(Dra Abu el-Naga)での調査や、ナポリ東洋大学によるエジプトの東部砂漠(Eastern Desert)の紅海に開口するワディ・ガスス(Wadi Gasus)での踏査、同じく紅海に面するマルサ・ガワース/ワディ・ガワース(Mersa/Wadi Gawasis)での調査が取り上げられた。スーダン内での調査は、エリトリア国の国境に近いカッサラ(Kassala)地域での調査などが扱われ、ナイル河流域に立地する遺跡から紅海そしてスーダン東部に至る広汎な地域でのイタリア隊の調査活動が紹介された。この中で、ベトロ教授の発表では、ドゥラ・アブ・エル=ナガ地区のテーベ第14号墓(Theban Tomb 14)西側に位置するM.I.D.A.N. (La Missione Italiana a Dra Abu el-Naga) 05墓の発掘から、同墓における墓の盗掘と再利用が、3次元復元した墓のモデルを用いつつ示されたことが印象に残った。

イギリスやフランスなどと同様に、イタリアにおける古代エジプト・スーダンへの関心も、19世紀初期以降に高まりを見せるが、今回のCREの基調講演では、上記した近年のフィールド調査に加え、博物館内の遺物コレクションやアーカイブの再検討と活用に関わる近年の研究活動も述べられた。トリノ・エジプト博物館(Museo Egizio)は3万点以上の古代エジプト・スーダンコレクションを誇る世界有数の博物館であるが、グレコ博士により、現在進められている同博物館所蔵遺物の再整理と出版に向けた活動が紹介された。特に20世紀初頭にイタリア人エジプト学者であるエルネスト・スキアパレリ(Ernesto Schiaparelli)が行ったルクソールの王妃の谷(Valley of the Queens)や、ゲベレイン(Gebelein)、ヘリオポリス(Heliopolis)といった名だたる遺跡の出土遺物が対象である

という。この他ピッキ氏により、ボローニャ考古学博物館 (Museo Civico Archeologico) の古代エジプト・スーダンコレクションの歴史と保全・公開活動が、ピアチェンティーニ教授によりミラノ大学におけるエジプト学者の手稿・写真の収集などによるアーカイヴ構築活動が講演された。ミラノ大学のアーカイヴの構築では、フランス人エジプト学者のヴィクトル・ローレ (Victor Loret) やイギリス人エジプト学者のジェイムズ・クィベル (James Quibell) らの手による写真や手稿などが収集されているという。特にクィベル関連の資料の中には、エジプト博物館 (Egyptian Museum) が19世紀末から20世紀初頭にかけて主要な巻を刊行した Catalogue général シリーズに関連したクィベルの手稿なども収集されているようである。これまで明かされていなかった1900年前後の調査事情や研究の背景が分かる資料が含まれている可能性があると考えると大変興味深い。

今大会の核心的部分である、若手研究者による研究発表の予定本数は、口頭発表100本とポスター発表21本を合わせた121本であった。ただし、これらの発表の中にはキャンセルされた事例もあったので、実際に会場で発表された研究発表の数は予定数よりは減少している。口頭発表はセッション形式で行われた。セッションは「グレコローマン、及びビザンツ時代のエジプト (Greco-Roman and Byzantine Egypt)」、「ヌビア研究 (Nubian Studies)」、「言語と文献 (Language and Texts)」、「美術と建築 (Art and Architecture)」、「宗教と信仰 (Religion and Cult)」、「フィールド調査 (Field Project)」、「博物館とアーカイヴ (Museum and Archive)」、「物質文化 (Material Culture)」、「エジプト学への新技術の応用 (New Technologies applied to Egyptology)」、「ミイラと棺 (Mummies and Coffins)」、「社会 (Society)」、「環境 (Environment)」の計12セッションが組まれた。これらのセッションのコマ数は様々であり、少ないものでは「エジプト学への新技術の応用」は2コマの口頭発表から、多いものでは「ヌビア研究」の15コマの口頭発表からなるセッションも見られ、後者のような構成発表数が多いセッションには2日間に亘って開かれた事例もあった。古代エジプト・スーダン研究を包括的に扱う本会議の趣旨に基づき、考古学や言語学など学問分野の異なる幅広い研究発表を取り扱っている点が特徴的である。上記のように、会場は3つに分かれ、かつ並行してセッションが進められたため、単純に見積もっても筆者が同席できなかった口頭発表は全体の3分の2に上る。したがって、すべてを網羅的に本稿で紹介することは不可能であるので、以下では筆者が注目した幾つかの発表について紹介したい。

ノーラ・クーフ (Nora Kuch) 氏は、自身が参加してい

るエジプト初期王朝時代墓地遺跡のヘルワン (Helwan) 遺跡から出土した意図的に破碎されたり、傷つけられたりした石製容器から、遺物の破壊行為にまつわる墓制の可能性について議論を行った。議論の中で、ジェイムズ・ギブソン (James Gibson) によって提唱されたアフォーダンス (affordance) の概念を念頭に、遺物と被葬者・葬送執行者との関係性を念頭に置いた議論が印象に残った。細心の注意を払いつつ行う最近の発掘調査であるからこそ可能な議論と言える。

マルティン・オドラー (Martin Odler) 氏は、統計ソフトであるRを用いて、エジプト古王国時代の銅製模造品を対象に、工作用具や狩猟用具、武器などの分類ごとに法量の規格性について明らかにしようと試みた。古代エジプトの尺度の一つであるパーム (Palm)²⁾ が、法量に関係性を有することがRを使った統計からも見出せるという。

フェデリカ・ウリアーノ (Federica Ugliano) 氏は自身が現在行っているトリノ・エジプト博物館に所蔵されているヘマミエ (Hemamieh) 遺跡の先王朝時代墓地出土資料に関して紹介を行った。ヘマミエ遺跡は著名なガイ・ブラントン (Guy Brunton) とガートルード・ケイトン=トンプソン (Gertrude Caton-Thompson) によるイギリス隊の調査の他に、スキアパレリによる調査が1905年に行なわれているが、後者の詳細はこれまでほとんど分かっていない。ウリアーノ氏は、エジプト博物館に所蔵されている資料と、スキアパレリによる手稿を組み合わせ、彼の発掘の復元を試みようとしているようである。現状、19世紀末から20世紀初頭にかけて盛んに発掘された先王朝時代の墓地は刊行物に恵まれていない場合が多いので、こうした過去の発掘調査の復元的な研究は今後重要となるだろう。グレコ博士の基調講演とも密接に関わる研究である。

このほか口頭発表では、エジプトの遺跡では、セレーナ・ニコリーニ (Serena Nicolini) 氏による、イェール大学とボローニャ大学によるアスワン-コム・オンボ考古学プロジェクト (Aswan - Kom Ombo Archaeological Project) の一環として行われた東部砂漠のワディ・エル=ラウイ (Wadi el-Lawi)、及びワディ・ラス=ラス (Wadi Ras-Ras) での踏査成果の発表や、ユリア・ヒラ (Julia Chyla) 氏によるゲベレイン考古学プロジェクト (Gebelein Archaeological Project) のGISを用いた一般調査の成果の発表、スーダンの遺跡では、マルティーノ・ゴッタルド (Martino Gottardo) とフランチェスカ・イアナリッリ (Francesca Iannarilli) によるジェベル・バルカル (Jebel Barkal) における調査の成果、ファウズィ・バヒエト (Fawzi Bakhiet) によるアトバラ・ダム (Atbara Dam) 関連の緊急調査の成果の報告など、フィールド調査から得られた最新の知見が提供された。また同時並行の

ため筆者はあまり参加しえなかったが、王朝時代の文献や宗教に関する発表も多く行われた。

ポスター発表においても文献研究から考古学研究に及ぶ、様々な発表がなされた。ワルシャワ・ミイラ・プロジェクト (Warsaw Mummy Project) のCTスキャンを用いたミイラの性別判定、サイモン・アンダーウッド (Simon Underwood) によるアブシール (Abusir) 所在の第5王朝プタハシェプセス (Ptahshepses) のマスタバにおける柱列構造の再検討、ローネッケ・デルペウ (Lonneke Delpout) による王朝時代の馬の図像に関する研究、などが発表された。

4. その他会期中のイベントについて

基調講演・研究発表以外に国際会議で定例のイベントも幾つか行われた。定番のコンフェレンス・ディナーは、会期2日目の夜19時から、会場からほど近いパルテノーベ通り (Via Partenope) 26番に所在するレストラン、アントニオ・エ・アントニオ (Antonio & Antonio) で行われた。ヨーロッパでは毎年数多くの古代エジプト・スーダン関係の会議が行なわれていることもあってか、参加者間ですでに知己であることも多く、和やかな雰囲気の中で談笑が交わされた (図3)。

国際会議でもう一つの定番である巡検では、最終日の6日午後にナポリ市近傍に所在するポンペイ (Pompeii) 遺跡へのツアーが実施された。ポンペイ遺跡は言うまでもなく世界で最も有名な遺跡の一つであるが、これまで訪問した経験がなかった筆者にとっては、実際に訪れることで初めて紀元70年代の人々が遺した痕跡に触れることができ、感無量であった。

最終日午前の研究発表後には、CREで恒例である全体会議が催された。この全体会議は、本会議の総括であると同時に、CREの運営上の問題点や、常任委員の改選などが行われる場である。今回のCREでは、後述する論文集



図3 コンフェレンス・ディナーの様子

の査読体制や、出版先などが議論されるとともに、3人の常任委員のうち1人が改選され、ナポリ東洋大学のイラリア・インコルディノ (Ilaria Incordino) 氏が新たに委員に選出された。全体会議後には、大会運営に携わった、運営委員・ボランティアが一堂に会して、常任委員らから感謝と祝福の言葉を受け、閉会となった。

5. 結びに変えて

CREでは、年次大会後にその会の発表のうちのいくつかを論文集として出版することが第1回目から継続している点も特徴にあげられる。初期3大会の論文集は、当時Archaeopress社から刊行されていたBritish Archaeological ReportsのInternational Seriesにおいて出版され、2008年マンチェスター大会の論文集はRutherford Press社から出版された。これら以外の年次大会の論文集はOxbow Books社から刊行されており、CREナポリ大会の論文集も2018年にOxbow Books社から刊行される予定である。

今回のCREにおいても多岐に亘る分野の研究発表がなされ、若い研究者同士での交流がなされた。ただし、会期中幾つかの問題点があったことは否めない。まずは発表キャンセルの多さである。実際の大会時には、少なくとも10本の研究発表がキャンセルされたと記憶している。こうしたキャンセルにより、発表順序などが再編された上に、変更が十分に周知されなかったため、希望していた発表を聴講することができないといった事例が多々見られた。また時間管理も多少ルーズな面が目立ち、朝9時から基調講演の開始が15分以上遅れた結果、後の予定にシワ寄せが来る、あるいは分科会間での発表終了・開始時間が一致せず、発表会場において途中参加・退出をせざるをえない事態も多く見られた。発表内容に関しても、意欲的な研究が発表されているものの、反面、結論らしい結論が提示されない発表や、研究構想の開陳に終始した発表も残念ながら散見された。発表の中には、素晴らしい内容を持ったものもあったので、口頭発表らしく、妥当性は議論の場で戦わされることとしても、少なくとも研究成果や結論を提示した発表の数が増加することが望まれる。要旨投稿の段階で、内容面での規定を追加するなどの対策を行うことが、今後の改善のためには必要ではないだろうか。

いずれにしても、本会議の強みは、毎年開催されるという点だと思われる。すなわち、若手研究者にとっては、自分の研究成果を比較的世代の近い研究者にぶつけ、また議論をすることができる貴重な場が、毎年開かれているのであり、自身の研究の現在位置を把握する上で有効な場であると言える。学会で実りのある議論ができ、研究発表の内容を洗練させることができたのならば、論文集で研究発表

を行える機会にも恵まれることとなる。論文集へ研究論文を投稿する場合には、論文が掲載されることを目指す以上、その目標が達成されれば最も良いことは自明である。ただ仮に不受理であったとしても、査読審査を経ることになるので、査読者のコメントからさらに自身の研究を深化させるための端緒を得ることができる、貴重な経験となると考える。

今回のCREは2018年6月25日から28日までの間、チェコのプラハで開催される。興味や関心がある方は、公式ホームページ (<http://cregyptology.org.uk>) を参照さ

りたい。過去の大会とその論文集、次回大会の告知などの情報を得ることができる。日本を含め、さらに多くの若手研究者が世界中から参加することができれば、古代エジプト・スーダン研究はさらに飛躍するのではないだろうか。

註

- 1) 単語 (words) ではなく文字 (characters) であるため、要旨の分量は単語単位と比べ、より短く限定されることとなる。
- 2) 1パームはおよそ75mmとされる。

黒沼 太一
首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程
Taichi KURONUMA
Graduate School of Humanities,
Tokyo Metropolitan University

